

コミュニケーションの自由^{注1}

清水正男

1 平和な生活と和

(1) 平和な生活の中のコミュニケーション

藤村の詩に、「まだあげそめし前がみの、りんごのもとに見えしとき、前にさしたる花ぐしの花ある君と
思いけり。やさしく白き手をのべて……はじめなり」とあつたのを記憶している。平和で美しく生活の中
に生きているコミュニケーションである。

(2) この世と和

われわれの世はあたかも無底的深淵の上にただよう木の葉をよせ合つて島をつくり、その上を住家^{すみか}とす
る人々のむれであると仏の教えは説くようである。お互いに肩をよせ合い助け合つて生きる姿は、おだや
かなまなざしと、真心から出るやさしい言葉のやりとりの上に成立する。賢い一人ひとりの存在は欠かせ

ない。

孤立や、ましてや争乱はお互いの破滅を招くのみであることは、年々必ず襲来して来るモンスーン等による大災害をはじめ多くの苦難をまのあたりに見て、それにとり組むべしとして体験しているところであった。

2 和の環境

(1) 環境に生きぬく人

厳しい環境や苦しい事態は人間を不幸にするよりは、むしろ勇敢にして打開への強烈な斗志と、より高度な智慧の開発を進める事が多く見られる。環境との間で一人ひとは賢明に生きて来た。まず環境に適応する努力が見られるが、やがて至らない環境に対してわれわれに好都合になるように環境の再構成を實現するに至る努力が必死に展開される。

多くの人々は話し合い、打開の道をさぐりそれぞれの得手とする道を分担し全力をあげての協力的態勢下に成功させる。そこには考えるだけでなくたくましく実行する創造的知性を持つに至る。

(2) 創造的知性・行為

その過程で人々は真の討議が、各人の持つ能力をすべて出し合った上で、誰のものよりもすばらしいものを新しく生む事を発見する。そこには青白いインテリではなく、たくましい知性、前人未踏の地を開く

力と意志、フロンティアスピリットがある。

それは思うに、各自の心から発せられた行為行動である、ひとのために役立つものである、と同時に誰にでもうなづいて貰える実証可能な行為でもあるので、すべての人々に受入れられ力づよく支持される。

3 環境の基盤

(1) 情報の重要性

今日世界には多くの国を見るが、単一民族による最大のものに日本がある、近々両独統一の暁には、それに次ぐドイツ民族国家が持たれるという。同一の言語、同一の文化のもとに生活する巨大な国民は世界にとり重要な責務を持つ。と同時に世界に対して孤立化を戒め開かれた国でなければならぬ。

人類は時に民族を超え集団生活をしながら個を発見し、一人ひとりのもつ尊厳性を悟り合い愛と尊厳により助け合い協力して、孤立をおそれ良心に忠実に生きようして来た。しかし視界の狭さ、情報の欠如などから争乱が各地に持たれた。スタンフォード大学隣にあるフーバーライブラリーはこれら世界の争いのコレクションとして知られる「情報の宝庫」である。

(2) 情報化社会（独裁の悲劇）

情報に背をむけた心なき独裁者の無謀な政策のために世界の大穀倉地帯と称せられたウクライナで軍事費調達のため収穫物をすべてとり上げられた数百万の農民が餓死しそのためうえる彼等により幼児の多く

が誘拐^{ゆうかい}され、食糧になつてしまつたとする説は世界の人々の耳目を驚かせ悲しませた。閉ざされたコミュニケーションの国の悲劇である。

かつてわが国は国際的に孤立し、いわゆるABC Dラインによつて経済封鎖に追い込まれ、遂に世界戦争に突入した上に性こりもせず、史上最悲惨とされるインパール作戦の大敗北をも見た。記録によれば、敗軍の将として、牟田口・河辺両中将、勝利側としてウインゲート准将、スバス・チャンドラボース等があげられる。情報の偉力と、これに盲目であつた愚将のもつ誤解と誤算によつて、第三三・第一五・第三一の各師団の損耗が甚大（八四%、八〇%、六七%）であつて、情報を欠くことの恐ろしさをひしひしと痛感するものである。

コマヒの丘に立つ英軍戦死者記念塔に“*When you go home, tell them we died for their tomorrow*”あなたが故国へ帰つたならわたし達は故国の人々の明日の為に戦つたということを伝えて下さい、とある。私は加えたい。そして現地の人々の平和のために”と。

かつて国際機関の要請によりソ連邦と協力しての教育専門家としてこの地ビルマに参り（昭五四、五五年）勤務したのであるが国立ラングーン大学の私の研究室のメンバーは、日本人の眠るチャンドウ墓地及びタームエ墓地に参る私に遠慮してか必ず門外で待機した。しかしミンガランドン空港近くの墓地（英軍）前を通過する折は全く様相が一変した。

清楚な墓地に私と私の家族（妻と娘）をせかして導き入れた彼等は、吾々の自由のために斗つた人々を葬る”と記された門の裏側をゆびさしつづくぐり、嬉々として、ブーゲンビリアの咲き乱れる中を自国民

の墓であるかのように案内したものであった。

マウンテンバットン殺さるの悲報をキャッチした清水研の技師が「モンバットンが殺された」と泣き乍ら研究室へかけ込んで来た。ビルマ国民の悲しみを静かに示す半旗が私のインヤレークホテルにも、掲げられ数十ヶ国を超える各専門家はそれぞれの想いでこれに敬意を表した事を今でも忘れられない。

今尚語りつがれているいまわしい大敗北が情報をろくに得ようとしなかった傲慢さ、^{ごうまん}それにまましてそこに住む人々を心から信頼する事を忘れた愚かさをしみじみ痛感するものである。

さてコミュニケーションには不可欠な概念の一応の統一が必要である。にもかかわらず東西そして南北にもこの概念の^{注3}不統一が目に余るものがある。その不合理性を悟り訂正した国も出て来てはいるが、それもつい半年前（平成二年春）からであるのも情ない。

4 自由と国際協力

(1) 真のコミュニケーションの自由と繁栄

真の意味でのコミュニケーションの自由が強烈に熱望されはじめている。しかし、ベルリンの壁の愚かしさに気付くのにどうしてこんな長い時間が必要であったのであろうか。ここにも情報を武力などによって抑圧する、ましてや人の心を圧伏させようとの愚劣さを知る。

さてこのコミュニケーションの自由にまで人類は余りにも長い貴重な時間を浪費して来ている。思考や

言論が神から人々に与えられた大切な贈物で平等かつ不可侵である事を忘れてしまったためではないだろうか。

武力によってのみ平安は存在すると広言する国々はわれわれの身近にもある。いわゆるストラトペドウポリテイア *στρατοπέδου πολιτεία* (陣営国家) の好例とされる *Μπαρτα* では統治階級の *Μπαρλιαται* スバルライアタイ *Περιοικοι* ペリオイコイ と隷としての *“Ελευται”* ヘイロータイ とを従え、陣営国家を形成した。男の新生児は *Λεσκει* レスケイ (公会堂) で厳重なテストを受け不合格者は岩窟の *Αποβεται* アポベタイ に捨てられ、生き残った者は厳しい戦士としての訓練を受け生涯軍籍にあつて斗つた、スバルタ教育である。国家主義、軍国主義、統制主義のアルケー *αρχή* とも言えるものであつた。

この種のストラトペドウポリテイア的存在が今日でも見られるのは残念である。一刻も早くこの世界から姿を消すのを祈るのみである。言論を強権を以て抑圧し、コミュニケーションの極端な統制を断行し、庶民の耳と口と目を全くふさいでしまった悪行への報いは無気力な国民、産業の破滅、体裁の破棄となつて現れている事は世界市民が等しく見聞しているところである。

(2) マス・コミの自由

かつて帝王の独占からようやく独立したマス・コミであつた。時代の流れの中で発展し、今やマス・コミの自由は、人類の生存のために不可欠な存在となつた。われわれはこの歴史を大いに誇つてよい。しかし、この自由もさらに巨大な資本の力やときに謀略などによつてその存在は無気味であり、不安でもある。この声に答えてマス・コミは社会的責任を負わねばならなくなる。

(3) マス・コミの自由研究

一方、世界は大きく変革しつつある。それは世界市民の耳目を驚かせるに足るものである。そしてその原因の大きなもの一つに、コミュニケーションの開放にある事は論をまたない。そのためここで吾々はコミュニケーションの真の自由、人類の幸福への道を探り、そして毎日の生活で何を考え何を実践したらよいのか。その道を知るよすがとしなければならぬ。

5 世界の潮流（グローバル化）

——コミュニケーションの自由基調（マス・コミの四理論）——

(1) 日常生活のグローバル化とコミュニケーション

① 衣食住産業のグローバル化

日常生活を支える衣・食・住・産業のいずれもただ一国の単位で動く事は不可能になって来ている。世界各国が相互に関連し合いながらそれぞれの発展を進めて来ている。特に資源や資本、技術の偏在から世界的繁栄への道へ進む過程で大きなエネルギーの移動が見られる。

② 国家・国民的エネルギーの源泉

民族、国家、国民の発展へのエネルギーは、形成する市民それぞれのもつエネルギーと無縁ではない。彼等の図り知れない巨大なエネルギーそしてその意欲に大きく依存している。そしてそれが国際協調へと動いている活力源でもある。

③ 国際協力と情報

国際協力が今日のように活発化したのは今世紀の大きな特色と言えよう。とくに大戦後それが顕著である。しかしグローバルな世界の状況をとらえる事は困難である。主観化はまぬがれないところであろう。

私は、狭い経験ではあるが自分の経験をもとに以下この半世紀を都合上四期にわけてふりかえりたい。

- (a) 一九五四～一九七九……
- (b) 一九七九～一九八〇
- (c) 一九八〇年代
- (d) 一九八九～一九九〇以降

(a)は戦後のいわゆるCold War時代、東西対立のもとに閉鎖されたコミュニケーション時代である。

(b)私は、ビルマでの国際機関における教育専門家として、殆んど世界各国の人々や情報にふれ、日本のマス・コミのフィルターを通さない世界の流れのほんの一部ではあるが自分の目で見る事が出来た。その中で、隣国であるソ、中、印、北鮮、韓等々の諸国の素顔を、毎日のホテル生活と専門家としての仕事からうかがうことが出来た。

とくに私のプロジェクトの対象であるビルマの人々、さらに協力者であるソ連邦の飾らないせつばつまった姿を確実に把握する事ができた。これは当時進行中の東京サミットの状況を遠い異国から眺め世界の将来を私なりに判断する上にも好影響を与えるものであった。

ソ連邦についてのその末期的特徴が極めて顕著で劣悪である事を自らの目で知りえたのは、驚きであつ

たが、自分の長く住む日本でこれが必ずしも充分に察知できなかったのはなぜであろうか。日本のマス・コミの風土について、考えさせられるものがあつた。

(c) 一九八〇年代

東欧・ソ連邦の崩壊しようとする前兆が鈍感なわが国に居ってもだんだん判るようになって来た。とくにこれらの国々での経済的危機が見えて来た。その原因が奈辺にあるかも知られるようになった。

(d) 一九八〇—一九九〇

それらの疑念が現実のものとなって顕在化して来た。(かくして一九九一、東欧につづいて、ソ連邦を主とするコミュニズムの崩壊を見た。)

④ 教育の重要性(とくに市民の主体性確保への道)

ビルマ在任中から感じた点は、当局がコミュニケーションを極度に警戒しラジオ・写真機・テープコーダー等の国内持込みにさえ神経質に対処し、圧力を加える状況下で、庶民が働く意欲を失い、ひいては何事もやる気を失わせ、経済的に大陥没時代を招来しているのを見た。それに軍部の弾圧と抑制がさらに加わるといった調子。これが東欧にもソ連邦にも言えることであつたのではなからうか。

ここで吾々は、マス・コミについて一層の研究を進めるべきであろう。そして教育を充実し前進させる事が肝要である。市民の主体性を確保し、勤勉で健康、国際的にも信頼される市民をえたい。

(2) マス・メディアの諸理論

この事については、シーパー、ピータスン、シュラム等によるマス、メディアの四理論(Four Rationales

マス・メディアの四理論

	権威主義理論	自由主義理論
発達の時期と地域	16～17世紀のイギリスで発達し、広汎に受け容れられ、現在も多くの地域で行われている。	1688年以後のイギリスおよびアメリカで採用され、他のところにも影響を及ぼしている。
起源	君主あるいはその政府の絶対権力の哲学ないしはその両者から生まれた。	ミルトン、ロック、ミルの諸著作、および合理主義、自然権の一般哲学から生まれた。
主目的	権力の座にある政府の政策を支持し進展させること、および国家に奉仕すること。	知らせ、楽しませ、売ること。しかし主としては真理の発見を助け、政府をチェックすること。
メディアを行使できる者	王の特許ないしそれと同等の許可を得ている者	メディアを行使する経済的手段をもっている者なら誰でも。
メディア統制の方式	政府の特許、ギルド、発行許可、および時に検閲。	「思想の自由市場」における「真理の自働調整作用」、および裁判所。
禁止事項	政府機構および当局者批判。	名誉棄損、ワイセツ、淫蕩、および戦時治安妨害。
所有形態	私有ないし公有。	主として私有。
他理論との基本的な相違点	政府の政策を実施する手段であるという点。ただし政府所有である必要はない。	政府をチェックし、社会の他の諸必要をみたす手段であるという点。
	社会的責任理論	ソヴェト＝全体主義理論
20世紀にアメリカで発達した。		ソ連で発達した。しかし同様のいくつかのことがナチスやファシストによっても行われた。
W.E. ホッキングの著書、プレス自由委員会、実際家およびメディア倫理綱領から生まれた。		ヘーゲルと19世紀のロシア的思考の合成であるマルクスのレーニンのスターリン的思想から生まれた。
知らせ、楽しませ、売ること。しかし主としては抗争を討論のレベルに引き上げること。		ソヴェトの社会主義制度の成功と持続、および、特に党の独裁制に寄与すること。
言いたいことのある者はすべて権利をもつ。		忠誠でかつ正式の党員。
社会の世論、消費者の行動、および職業的倫理。		監視および政府の経済的または政治的行動。
公認されている人権、および重要な社会的利益の電大な侵害。		党の目的批判、ただし戦術は別。
政府が公共サービスを保障するために乗り出す必要のある時以外は私有。		公有。
メディアは社会的責任の義務を負わねばならぬ。もし負わぬ場合は、誰かがメディアの行動を監視せねばならぬという点。		国家に所有され、完全に統制されたメディアが、国家の武器としてのみ存在しているという点。

生
き
る

八
四

for the mass media) を見る^{こと}が^ある。

權威主義理論 (Authoritarian) 自由主義理論 (Libertarian) 社会的責任理論 (Social Responsibility) ソヴェト＝全体主義理論 (Soviet-Totalitarian) 等^ある。

それらは、上に掲げるところの表によってその全貌を知る事ができよう。表は四理論^がどのよう^うであるかを知り易くするため、八項目にわたって検討比較している。即ち各理論^{につ}いて

- (a) その理論の発達した時期と地域
- (b) その起源
- (c) その理論の目的とするもの
- (d) 各理論では、それぞれのメディアの行使者は誰か
- (e) メディアを統制するのはどのような方式か
- (f) 各理論でタブーとしてふれてはならない事項は何か。
- (g) マスメディアを所有する形態はどうか
- (h) それぞれの理論は他の理論とどの様な基本的な差異をもっているのか
等^あである。

6 まとめ

- (1) 平和な世界で快適に生活するために必要なもの

従来は一応世界は東西にわかれて、それぞれの陣営は、生きぬくために必要な対策を樹立し堅持しようとした。しかしそれには極めて主観的な点も見られた。

しかし主体性を人間が持つこと並びにその為にお互のコミュニケーションに制約を持たせない事が漸次認められようとしている。とくに独裁的な行き方については必ずしもすべての民族・国家が是認するものではない。

むしろコミュニケーションの自由が各市民の主体性を保証し、平和的な生活を送るのに必要な事が認められた。

(2) 今後の世界

この講義を終了するに当り、私は世界の流れを説明した。そしてこの流れの必然性に疑念を持たなかった。

今後の世界の情勢は、マスコミについてより進歩した姿に発展して行くことが望まれよう。そして、そのために教育もその責任の一端をになう事になろう。(平成二年)

テーマがテーマであるだけに、この論議から約二年後の世界は大きく「激変」した。東西対立の解消世界の様想の一変。つゞく湾岸戦争、世界各地の争乱など国家・民族のもつ自己主張、特殊性の強調と、国際化への動きとの間の大きなギャップの調整が大きな課題となっている。

各民族・各国家がもう一度グローバルなこの地域社会と自国の関係を見直さねばならない時代に突入し

ていることを自覚してすばやく対応すべきである。コミュニケーションによる打開が今こそ要請される。

注1 平成二年に講議したものをこゝに掲げる。

2 のちに再独統一なり約八千万のドイツ民族統一が成った。

3 政治的な概念には同一概念に相反する意味が主張されているそのため話し合いを困難にしている。

